



令和3年1月1日現在
世帯数 : 803世帯
人口 : 1452人
男 : 706人
女 : 746人

観光都市の ニューノーマルを探れ!!



先日、幼少期から利用してきた近所の銭湯がリニューアルオープンしました。コロナ禍の自粛生活を送る身には、身近で楽しめる息抜きの銭湯が、以前にも増して楽しみな時間となりました。連日、人の姿もまばらな冬の松本（しかもコロナ禍）ですが、この銭湯には、ひっきりなしに客がやって来ます。

昨年末、私はSNSや知人の繋がりを介して、『観光都市の商店街へ期待すること』を中心としたアンケート調査を行いました。性別も世代も、住む国すら違う方々の答えですが、多くの方は共通して、身近な商店街には『暮らしに根差したサービス』を期待していることがわかりました。新鮮な生鮮食品を扱う店や、昔ながらの町のカメラ屋、写真館の復興を望む声。また、早朝から夜遅くまで、手作り

の総菜が買える店や、託児施設を求める声。通勤や通学に長い時間を費やす地域の方からは、「近所の商店街にコワーキングスペースがあったら、帰りに買いものをして、家事業や育児がしやすくなりそう」という意見も寄せられました。

一方、肝心な『観光都市の商店街に望むこと』ですが、「正直イメージが湧かない」「観光地はその場に行くことが魅力の大前提で、仮にオンライン商店街を開設しても、店主や商品、町の姿が見えなければ魅力を感じない」という厳しい声もいただきました。

さて、国内有数の観光地である松本市は、この現実をどう受け止めるべきなのか。私達自身が旅を求める心を失わないように、いずれ移動の自由を取り戻せば、松本を

指して旅に出ようとする人は必ず帰ってきます。『動けない今』、私達が取り組むべきは、再び地域の構造に目を向け、『観光地』という誇りに影を潜めていた『暮らし』に光を当てることではないでしょうか。派手なイベントばかりを重視するのではなく、純粹な便利さや、安心を丁寧に伝え届けることではないでしょうか。再び、ここに暮らす人の声をよくよく聞き、変わりゆく社会に必要とされる商店街のあり方を考え直してみるのはいかがでしょうか。まちを見つめる角度一つで、私たちのまちは新しい輝きを放つのもかもしれません。



いつもは観光客で賑わう通りもコロナ禍でひっそり

Presented by
視聴覚委員会



初めてのデジカメ講座 《写真展》

講座受講者が撮影した写真を展示しています。ぜひお立ち寄りください。

期間 1月26日(火)～2月25日(木)
(第2・第4水曜日は休館)

時間 午前9時～午後9時
※最終日は午後2時まで

会場 Mウイング2階 ふれあいロビー



手作りクリスマスツリー
冬空に輝く
(12月 伊勢町通り)



年賀状
(元日 松本郵便局)

第一地区公民館の視察研修は、新型コロナウイルスの影響で春は中止となり、一年ぶりとなる11月に行われました。バスにしても二人用の席に一人。食事、見学施設の入口では、非接触の検温、マスクの着用、手指の消毒と対策がとられています。

訓練犬指導の鉄則として、教えたことが出来た時は、えさを与えほめる、失敗しても絶対怒らないとのこと。その方法も含め、デモンストレーションを見せていただきました。電話、ドアチャイム等、音をキャッチすると障がい者に前足でタッチして知らせる。介助犬では落とした物を拾ってくる。目覚まし時計の音では、障がい者の上へ乗って知らせます。

聴導犬、介助犬は、その候補犬を育てて訓練し、それに応えられる個体と合わない個体があります。合わない個体はシニア・サポート



社会福祉法人日本聴導犬協会の視察研修

聴導犬の働きぶり



【問合せ先】
日本聴導犬協会
☎ 0265-18514615
✉ info@hearingdog.or.jp

犬、家庭犬として過ごすほうが良いと判断されれば、別の道に進むということ。手助けが必要な希望者側は、障がいの程度よりも必要性和熱意を持った方に訓練された犬たちを貸与という形で生活に生かしていただくということです。

そこにたどり着くまでの手続は、相当の熱意と努力が必要かなと思います。

宮田村の協会は、運営が寄付、遺贈により賄われているため、ウイルス流行により4月から寄付が激減しています。身障者支援、聴導犬等普及活動と社会貢献を継続するためにも、支援を募っています。

「松本ならではの旬の食材を満喫」

第一地区の飲食店さんのメニューを見ていると、この時期よく目につくのが「ジビエ」料理。松本やその近郊では、冬場に猟をする人もその獲物も昔から豊富でしたので、イノシシや野鳥などを食べる機会も少なくありませんでしたが、近年では過疎化により里山の荒廃が進む一方、ハンターの高齢化などで増えすぎたシカやイノシシの被害が問題になってきています。

行政でも野生鳥獣の個体数調整に力を入れるとともに、一部は自家消費されてはいたものの大部分は山中に埋設処分されていた「肉」の部分を有効活用できるようにと、ジビエ処理のガイドラインや認証制度を整備し、安全な食肉としての流通を進めています。そのおかげもあって、安定して品質の高いジビエが飲食店のメニューにも載るようになってきました。

調理人として働く傍ら、自ら狩猟免許も取り、営業時間外には狩猟に出かけ、その獲物を料理として提供するという趣味と実益を兼ねた方にお話を伺うことができました。

シカやイノシシといった大物はライフル銃や散弾銃を使つて、複数のハンターが協力して狩りを行っているそうで、そうした肉は保健所の許可を受けた食肉処理施設を経ないで営業では使えないのですが、空気銃での野鳥の狩りは気が向いたときに単独でも可能で、カモ、キジ、ウズラなどをお店では提供しているそうです。岡田から中山にかけての東山部は池や里山など狩りの好適地が豊富で、店からの移動にも時間がかからないため、良く通っているそうです。このあたりの野鳥は周辺の田畑をえさ場としているので、肉付きも肉質も良好で、お客様の評判も上々だといいます。

今シーズンはコロナ禍で観光客が激減してしまいました。が、ジビエ目当ての県外者の利用がない分、地元で暮らす私たちににとっては地元のジビエを楽しむ絶好のチャンスです。2月15日までが狩猟の解禁期間ですので、究極の地産地消を味わってみるのも松本の冬の醍醐味ではないでしょうか。

電車通り

今回のコロナ禍、いつ収束のことか。百年前に世界を席巻したスペイン風邪は、1918年から1920年にかけて流行し、世界人口(当時18億人)の半数から3分の1が感染し、全世界での死者は第一次世界大戦の戦死者の5倍、5千万人以上の人が死亡しました。日本でも、総理大臣原敬、大正天皇、皇太子(後の昭和天皇)も感染し、日本本土で45万人(人口の0.8%)の死者を出しました。諸外国でも、国民の1〜6%が亡くなりました。今回のコロナパンデミックとよく似ているようです。流行は3波に分かれ、1つの波の期間は長くて6か月、感染のピークは2〜4か月でした。そして、第1波での死者はほとんど無く、第2波以降に猛烈な死者を出したそうです。ヒトの移動・密集・接触の場が多いところが流行の拠点になりました。日本政府は第3波に至り、ようやく防止の政策を取ったところで、その辺は今回と違いますが、参考になります。また医学の進歩も当時と違いますが、今年こそはこのコロナ禍を克服しましょう。